

誌上 舞台 上方舞

江戸の「踊り」に対して、京阪神で生まれた上方の舞。江戸期から続く山村流、吉村流、煤茂都流、井上流を上方四流と呼ぶ。なかでも山村流は文化三年に山村友五郎が大阪で創流したのもとも古く、流派であり、現在も唯一大阪を本拠にする。

舞踊家



山村光（やまむらひかり）
山村流宗家の長女として大阪に生まれる。3歳から祖母四世宗家に手ほどきを受ける。早世した母・糸の意志を継ぎ、兄・六世宗家山村若と共に山村流を守る。平成5年より「山村光リサイタル」を主催。昭和62年咲くやこの花賞、平成3年7年大阪文化祭奨励賞、同11年大阪文化祭賞、同22年舞踊批評家協会新人賞、宝塚音楽学校日本舞踊講師

上方舞という名前を付けられたのは、坪内逍遙さんとも花柳章太郎さんともいわれられております。その昔は、大阪には山村流しかなく、舞といえれば山村のことで、山村舞とも呼んでいたようです。流祖が歌舞伎の振付師ですので、歌舞伎や文楽の中に本来の山村流の振りがございまして、「能」から振り付けた「本行物」、動物などをおもしろおかしく唄いこんだ「滑稽物」、風土や季節ごとの風情・風俗を写した演目などが伝えられております。

大阪という土地柄、宴席の座敷には舞が欠かせませんので、埃をたてないよう一畳の空間でも舞えるように配慮されてきたことが舞台芸術として育った「踊り」とは違ふところ。振りには抑え、心情を溜めて溜めて表現いたします。媚びたり、見せつけるような舞は御法度です。

そんな伝統から芸妓さんがお稽古しはるのは当然のことですけれど、能を背景にもつ行儀の良い舞として商家の子の行儀見習いの心得とされておりました。谷崎潤一郎の「細雪」にも、四女・妙子が地唄の「雪」を舞う姿が描かれています。

「地唄舞」ともいわれますように、江戸唄に対して、地元（上方）の三味線音楽であった流行り唄「地唄」に振り付けられた演目があります。たとえば、「いざや」「塚住吉」といった演目は「いざや行きましよう住吉へ」と芸妓を引き連れて住吉詣りというお大尽遊びの情緒を写

上方文化の真髄、ここにあり。



素肉人 山村光

していきまして、住吉さんの反橋を渡って、五代方さんを買込み、名物のゴロゴロせんべいや麦わら細工、つなぎ貝を売っている様子が出てまいります。

私どもの師範試験の課題のひとつ「ゆき（雪）」は、宗右衛門町の芸妓さんだった女性が出家し、雪の夜に鐘

の音を聞きながら、昔のことを思い出し、涙にくれるという舞なんです。鐘の音はおそらく谷町や上町のお寺から聞こえてきたのでしょうか。

南地大和屋でお正月に黒紋付で盛装した芸妓さんらが舞う「十二月」、また「浪花十二月」では、元旦から始まり、十日戎や宝恵駕籠、二月は初午、四天王寺の彼岸会やら名高いとされてきた難波のサツキ、天神さん、など、江戸末期から明治初期にかけての年中行事や風俗

が描かれる上方の花街の匂いが色濃く残る作品です。江戸期の名優・三世中村歌右衛門（成駒屋）は本来大阪の役者で、江戸での興行に下り、再び大阪に上った時に江戸の土産として、流祖山村友五郎の振付で「傾城」「越後獅子」「座頭」「業平」などの七役をひとりで演じ分けた「慣ちよつと七化」で大評判を取ったそうです。

以前から家元（光さんの兄、山村若さん）は、歌右衛門の七変化を描いた浮世絵を蒐集してございまして、今般、それらをもとに流儀に残る振りに新たに振付け、全曲通して上演いたしました。この復元も大阪が芸能文化の中心だった歴史を知るやすがになると思っております。

祖母、四世宗家は東京にお稽古場を持つことさえしませんでした。大阪を離れず、大阪で舞うてきましたので、山村の舞すべてに大阪の匂いや情緒を肌身に感じていただけると信じております。

私の小さい時は、天神さんの時には鱧を食べ、床几を出して火花を見るような暮らしでしたが、いまは大阪の風景や風物もずいぶん変わってしまいました。それでも人が心で感じることはおなじです。お弟子さんには、ふだんからお月さんひとつ見るにしても、じっくり深く感じる心をだいにしなさいというてます。そうすることによって、山村の理想としております「淀みのない、澄んだ水の流れるような舞」に近づけるのやないかと思っております。